Case Study
事例

「学ぶ」の余白

生徒が自分で学び方を決める学校を目指し、教員に時間を返すことからスタート

横浜創英中学・高校（神奈川・私立）

副校長
本間朋弘先生

コラボレーションウィーク担当
石原徳子先生

教員のシフト制により私学で完全週休2日が実現

2020年から働き方改革に着手し、わずか1年余りで、私学で教員の完全週休2日制（生徒は土曜日も半日登校）を実現し、時間外労働も大幅に削減した横浜創英中学・高校。その方法を学びに、全国の学校からの視察が引きも切らない。改革を推進してきた本間朋弘副校長は「働き方改革は、学校改革のための手段に過ぎない」と語る。

「学校は生徒の未来をつくる場所。教員の仕事も未来に希望のある環境に変わらなければなりません。何より『学びを生徒主体に移譲する』『実学的な学びをして社会に貢献できる人材を育てる』という本校が目指す新しい学校像のために、まず教員の時間にゆとりをつくることが不可欠でした」（本間副校長）

新しい学校像に着手する前段として、まず教員の完全週休2日制を導入。生徒は土曜日も授業があるため、教員は週2日の全員出勤日以外はシフト制にしたのだ。また、毎月2時間かけていた職員会議の無駄を洗い出し、1回平均15分とした。伝達事項は精度の高い資料の事前共有に切り替え、議題のない月は会議自体をなくした。さらに教員による委員会や分掌も大幅に削減。

「個々の教員の勤務時間が削減されたことにより、不在の平日対応などで教員同士がお互いに支え合う職場風土も醸成されていきました」（本間副校長）

方針転換の学校改革に向け副校長が職員たちに謝罪

横浜創英中学・高校の学校改革は、これからの社会に必要な力を生徒が身につけることが目的だ。

「教員が手取り足取り指導する今までの教育では、生徒が社会に出たときに幸せに活躍しているイメージが湧かなかったのです。当事者意識をもって自己管理ができ、自分の強みを実践して社会に貢献できる人材を育てるには、学びも学校運営も生徒主体に委ねるしかないと考えました」（本間副校長）

学校改革にあたって、本間副校長は、職員会議で職員たちに謝ったと言う。公立の超進学校を歴任してきた本間副校長は、11年前に横浜創英の進学実績を上げるミッションで転職してきた。講習や模試対策などを進めた結果、進学実績は大幅に上がった。しかし、当時は18歳の頂点学力の先を見ておらず、生徒と社会が繋がっていないことに違和感をもち始めた。その頃に現校長の工藤勇一先生と出会い、社会に役立つ基盤としての学び方改革を決意。

「私自身がシフトチェンジしたわけですから、そのことを素直に反省し、先生たちに伝えました」（本間副校長）

そして、工藤校長、本間副校長、歴任してきた学校で授業改革を推進してきた校長補佐の山本崇雄先生の3人のトップによる学校改革が始まった。

コラボレーションウィークで社会と繋がる学びを体感

同校の学校改革の本丸は学び方改革だ。最上位目標である学校像を実現するために、社会で必要な

取材・文／長島佳子

校長補佐
山本崇雄先生

■学校データ

1940年創立／高校生徒数1211名（男子392名、女子819名）。千代田区立麹町中学で学校改革を実践した工藤勇一校長が2020年に着任以来、校則や固定担任制の撤廃、学び方改革、教員の働き方改革などさまざまな学校改革を実施。入学志望者が急増している。

経験を落とし込むカリキュラム構築が進んでいる。

その一つが、複数教員で合教科授業を実施するコラボレーションウィーク（以下コラボウィーク）だ。高校1・2年を対象に、4日間で探究的な授業を体験する。教員同士が声をかけ合って24講座を設置。生徒たちは第5希望まで申請。普段関係性が薄い生徒が集まるよう教員側で調整し、受講講座を決める。与えられたミッションに対し、グループで取り組み、最終日に発表を行う。

「実社会は複数教科の知識の組み合わせで成り立っています。実社会に繋がる学びの生かし方を体験してもらうのがコラボウィークのねらいです」（コラボウィーク担当・石原徳子先生）

生徒たちは自分が興味あるテーマについてグループで研究を深め（写真参照）、インプットとアウトプットを反復することで知識の定着を体感。興味と学びのつながりを短期間で習得している。

さらなる改革に向けて教員のアップデートが必要

生徒に学びの主体を移譲する施策として、さらに今後、自由選択制の大幅な拡大と、学年制を柔軟にとらえることの2点を柱としている。前者は大学並みに生徒が時間割を自由に組み合わせて選べるようにする施策で、2025年度からの導入を目指している。学年制については、すでに中学校の英語科では学年の壁を取り払い、生徒同士が対話で学んだり、個人で学んだりと授業スタイルが異なる5つの教室から自由に選べる取組が始まっている。

「個別最適な学びとは、習熟度別に教員が集団を分けることではなく、生徒自身が自分の学び方を選ぶことです」（本間副校長）

「与えられて余白のない学校ではなく、無地のキャンバスに生徒が自由に学びをデザインしていく。そこに自然と余白が生まれていきます。そして、学び方を生徒に委ねたとき、教員に求められる専門性がより高まります。進化していく学び方についての知識を常にアップデートさせていなければなりません。また、生徒が選んだ学びが本人の力を伸ばせているか見取る力、生徒に学びたいと思わせる力が教員には求められます」（山本先生）

働き方改革により生み出された時間で、教員は生徒主体の授業に対応できる自己研鑽に時間を使うことができるようになった。

「生徒に学びを委ねることに最初は怖さも感じました。でも、主体的な大人に育ってほしいというイメージから逆算すれば、主体的な学びは必要なこと。教員にできることは、安心して発言し、楽しんで学べる教室の環境づくりぐらいだと感じています」（石原先生）

「家族を愛する以上に生徒を愛する必要はありません。いくら生徒たちを愛しても、未来をつくる支援はできますが、未来永劫生徒に寄り添うことはできません。自律に向けて手を離さなければならない。だから学校に長くいないで、家族を愛しなさいと。これが私の考える教員の余白です」（本間副校長）

コラボレーションウィークの授業例

英語科×情報科の「暗号ゲーム/クイズを開発せよ」。暗号の歴史や仕組みについて学び、言葉が目的ではなく手段であることを体感する。

理科×社会科の「集え哲学的サイエンティスト」講座。身近な社会問題が最先端技術だけで解決できるか、科学的・哲学的なアプローチで探究した。

本間副校長（日本史）と山本先生（英語科）がコラボした、幕末の侍が英語を習得していった観点を基に、生徒たち自身が英語の学び方を提案する授業。

考え方のヒント ≫ 余白とは、家族を愛する以上に生徒を愛さないこと。